

令和4年度

「地域における青少年の国際交流推進事業」

「信州グローバルセミナー2022」

成果報告書



長野県教育委員会

1. 事業概要

(1) プログラム概要

ハーバード大学やカールトン大学などに在籍する海外大学生（以下、「海外大学生」）を含め、様々な国籍や背景を有する大学生・大学院生及び長野県小布施町と協働し、全国から集まった22名の高校生（うち14名は長野県内在住）を対象とした6日間の「信州グローバルセミナー（（以下、「小布施サマースクール2022」）」をオンラインで実施した。

(2) 小布施サマースクール2022の実施

期間中には、高校生は海外大学生が専攻する学問領域やその生き方について、英語で学ぶ少人数講義（セミナー）や様々な分野の第一線で活躍する社会人からの講演会（フォーラム）、過去の自分を振り返る自己分析ワークショップ、小布施町民に生き方を学ぶインタビューワークショップなど、グローバル、ローカル双方の視点や価値観を学ぶことができる多様なプログラムを体験した。

2. 成果について（概要）

上記プログラムを通して、参加高校生には意識の変容が見られ、その状況は、参与観察や事前・事後アンケートの実施により確認できた。目的に対する成果は次のとおりである。

1. 「高校生の主体的な進路選択の場を提供する」という目的に対し、異なる学校・国籍・キャリアを持つ人々との交流を経て新たな一歩を踏み出す外向き志向が向上した。それぞれの価値観に触れることで、高校生が学校生活の中ではなかなか触れる機会のない経験となり、自身の将来に対して想いをはせる場となった。
2. 「グローバルにもグローバルにも活躍のできる、自身のコミュニケーション能力を向上させた人材の育成を行う」という目的に対し、日本国籍を持つメンターのみではなく、セミナーを通じた海外大生との交流を通して自身の紹介や国内外で活躍することへの志向が向上した。
3. 「継続的な高校生へのサポートを行い、自身のキャリア形成に向けての土台作りを行う」という目的に対し、報告会を開催することやサマースクール終了後にもメンターとの交流の機会を設けることで、高校生参加者への継続的な関係性づくりと成長を促し、一度の体験には留まらないサマースクール運営体制を構築した。

また、本事業は高校生を中心とした取組であるが、メンターとして参加した海外大学生及び日本人大学生についても、運営を通して人材育成に繋がる意識の向上が見られた。

3. 具体的な事業内容

(1) 計画・実施したプログラム

「小布施サマースクール 2022」

形式：オンライン

参加者数：高校生 22人（長野県内14人）

大学生 22人（国内大学生 15人、海外大学生 7人）

主な内容： a. 海外大学生によるセミナー（英語による授業）

b. 社会人講師によるフォーラム（講演会）

c. フリーインタラクティブ（社会人講師との自由な対話の時間）

d. リフレクション（1日の活動を振り返るグループ対話）

e. ワークショップ（大学生が企画する体験的学習）

(2) 小布施サマースクール2022の実施内容

0日目（前日） 8月14日（日）：事前研修

運営委員のみでリハーサルを実施した。運営委員のうち2名は小布施町から参加し、当日と同じ態勢で最終調整をした。

1日目 8月15日（月）

参加高校生は全国からオンラインで集合し、大学生に迎えられたのち、開会式に参加した。主催者である長野県教育委員会、共催者である小布施町長が挨拶を行った。開会式後、プログラム中に行動を共にする「ハウス※」メンバーで、自己紹介をはじめ、協力してクイズに取り組むなどして初対面の者同士が打ち解けられるように「アイスブレイク」を行った。

午後は、「Discover小布施」というワークショップを行った。大学生運営委員が小布施町内を散策しながら小布施町地域おこし協力隊遠山宏樹さんの解説のもと、クイズや川柳の制作を通して小布施町への理解を深めた。夕方は、「メンターフリーインタラクティブ」を開いた。ここでは、メンターの学問分野に対して質問をすることを通し、自身の興味分野の知識を深めることや、将来の進路選択への新たな選択肢の発見につながった。

夜は、ハウスごとにその日に感じたことを振り返りながら、自分の抱えている不安や今後の目標などについて話す時間（以下、「リフレクション」）を設けた。落ち着いた雰囲気の中、高校生は様々なことを話すことができ、その場で大学生からの意見をもらった。リフレクションはサマースクールの根幹をなすもので、期間中毎晩行われた。

※「ハウス」…期間中、高校生と大学生からなる行動班。多くの時間を共にし、1日の学びや個々の過去を振り返る中で年齢や出身に関係なくお互いの考えや想いを共有する。少人数だからこそ密な交流が生まれる場であり、プログラム後も続く温かい繋がりをつくる仕組みである。



2日目 8月16日（火）

午前は「セミナー」を実施した。今年度のセミナーの内容は以下の通り。

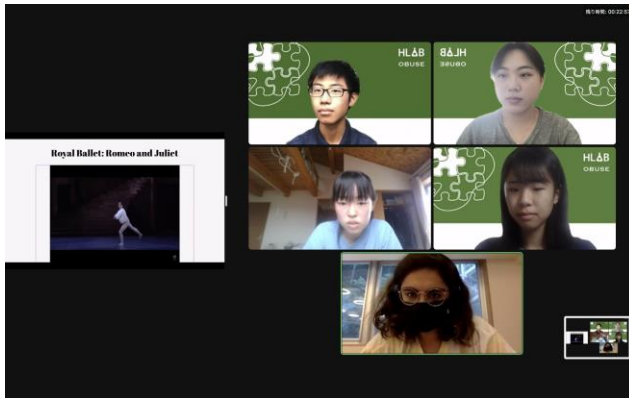
1. Philosophy and Justice
2. Art and Science, Linear Perspective and Computer Graphics
3. Over Tourism and Sustainable Tourism and Hospitality
4. What is Social Mobilization? - Introduction to Social Movement Theory -
5. Making Connections - Discovery of Conversations that Deepen Connections -
6. The Art of Coding - Learn to Code Artistically -
7. Aesthetics - The Beautiful Intersection of Art and Philosophy -
8. To See, To Be Seen - Connecting Body, Beauty, and Society -

セミナーは理系・文系の枠にこだわらず、リベラルアーツの根幹となる取組である。多種多様な分野から、高校生は自分の希望するセミナーを事前に3つ選択して受講した。オンラインではあったが、英語を用いたセミナーを通じて海外大学生講師との異文化交流を試みたり、英語での議論に積極的に参加したりする姿勢が見られた。

昼食時の「ラジオ企画」では、メンターの普段の学生生活での経験談、長野県にまつわるクイズを交えながら6日間のプログラムを提供するメンターの人物像を紹介した。メンターをより身近な存在として親しみを持って接する機会の創出となった。

午後は、高校生自身の人生を振り返り、ライフラインチャートの作成を通して深い自己理解を促す「自己分析企画」を実施した。この企画では、自分の人生に影響を与えた環境と自身の決断を見つめ直すことで、自身の選択に対して自信を持つことを促した。

その後、高校生同士が互いの学校や興味分野について双方向の交流を行う「高校生フリーインタラクシオン」を実施した。この企画では、全国各地から集まった高校生同士が、異なる学校の文化やカリキュラムを自由に交流を図る中で理解することにより、コロナ禍で失われた学外との交流の機会を生み出した。部活動や進路について同世代の高校生同士が真剣に検討をすることを通して、世代内での相互に刺激し合える場にもなった。



3日目 8月17日（水）

午前は、前日に続きセミナーを実施した。

午後は、小布施町民の方々のご協力のもと、高校生がオンラインで町民の方々にインタビューを行う「小布施企画」を実施した。高校生は小布施町に生まれ育った方々の視点から小布施町について学ぶとともに、コロナ禍以前にサマースクールのホームステイなどで培われてきた小布施町民の方々との双方向的な交流を行った。高校生はこの企画を通して、様々な生き方を学ぶとともに、「初対面の方々に人生観を聞き出すための質問を考えることの難しさを感じた」と、感想を残した。

その後、なぜ本サマースクールに参加をしたのかを言語化する「WHY YOU WHY HLAB」企画を実施した。サマースクール期間の折り返しとなった日に、高校生は互いにサマースクールへの参加理由を改めて言語化することで、残りの時間をより有意義にすることを内面化する機会となった。また、高校生は2人1組に分かれ相互に参加理由をより深掘りする質問を行った。午後に実施された上記2つの企画を通して、高校生とメンターの双方から、「相手に質問をすることが上達してきた」という感想があがった。夜は、参加者同士が気軽に語り合う「Coffee Chat」を開いた。任意参加ではあったが、多くの高校生が参加し、日常生活での悩みや進路の相談、大学生の専攻についてなど様々なことについて語り合った。



4日目 8月18日（木）

午前は、前日に続きセミナーを実施した。

午後は、長野県にルーツがあり、多様な場で活躍する社会人のゲストに講演をしていただく「フォーラム」を実施した。「株式会社Huuuu」代表徳谷柿次郎様と「ISN（インターナショナルスクールオブ長野）代表」栗林梨恵様をお招きし、高校生とは年齢もキャリアも異なる立場からのお話しを通して、自身のロールモデルを想像する場となった。

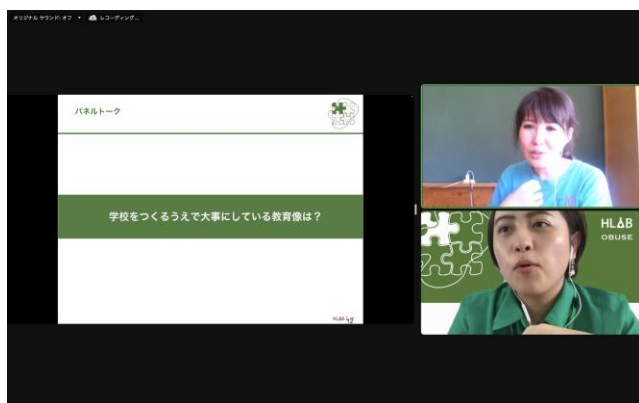
【ゲストの紹介】

○徳谷 柿次郎 氏（株式会社Huuuu代表）

コンテンツ制作会社を経て、2017年に「株式会社Huuuu」を設立。全国47都道府県のローカル領域を軸に活動。地元メディア『ジモコロ』編集長7年目。長野県の移住総合メディア『SuuHaa』を立ち上げたり、善光寺近くでお土産屋『シンカイ』を運営したり、自然と都会の価値を生かして活躍している。

○栗林 梨恵 氏（インターナショナルスクールオブ長野（ISN）代表）

幼児/児童教育でイギリスのバッキンガム大学卒業。バーミンガム大学院に進みMBAを取得。7年間のモロッコでの勤務の傍ら、厳しい環境の中で多言語多文化、生きる力を身に付けている子どもたちに接し、“多言語を使いこなし、自ら創り出す”ことで幸せを創り出す学びの環境を日本で実現するために2012年ISN設立へ。



5日目 8月19日（金）

午前は「海外大学生企画」を実施した。普段はセミナーを通してアカデミックな学問分野の交流だけに限られていた海外大学生と、身近にあるものを英語で紹介することを通して高校生は積極的に交流を図った。

午後には、社会の最前線で活躍をされる社会人の方々とのお話を通して、自身の進路選択やロールモデルの形成に役立てる「社会人フリーインタラクション」を実施した。

<フリーインタラクショングエスト>

- 岡本共平 氏：株式会社LAMP代表
- 君島登茂樹 氏：合同会社U.I.international代表
- 笠原純奈 氏：株式会社NTTドコモ首都圏支社 営業部
- 日高健 氏：小布施まちイノベーションHUB理事・事務局長
- 宮田湧太 氏：合同会社 HiDenBx設立
- 勝山翔太 氏：軽井沢風越学園スタッフ
- 新莊直明 氏：小布施町SDGs観光コーディネーター
- 寺田菜々美 氏：JR東日本 長野支局
- 佐藤舞悠 氏：スポーツマネジメントについて注目を浴びているIT企業に勤務
- 木下荒野 氏：小布施牧場 ミルグリーン社長
- 林美穂 氏：都内のコンサルティング会社勤務
- 古木里菜 氏：小布施町おこし協力隊・ゼロウェイスト推進員

<フリーインタラククションに対する高校生の感想>

- ・ 大学を卒業した後のキャリアには多様な働き方があり、様々な選択肢があることを知った。

その後、サマースクール2日目に実施した「自己分析企画」を改めて実施し、高校生はサマースクール期間中に変化した自身の姿を見つめ直す時間となった。

6日目 8月20日（土）

午前は、セミナーを実施した。

午後は、3日目の「小布施企画」の第2部を実施した。小布施町地域おこし協力隊の佐々木愛さんのご協力のもと、サマースクール期間の自身の集大成として花のコラージュ作品を製作することを通して、自身の過去・現在・未来への想いを芸術に昇華させた。高校生・メンターは事前に郵送された「フローラルガーデンおぶせ」で販売されるドライフラワーを使って、思い思いの作品を製作した。

その後、閉会式を行い主催者である長野県教育委員会、共催者である小布施町長の挨拶の後にサマースクール修了証書がオンラインで受け渡され、高校生は新たな環境に向けてメンターからの送り出しを受け、サマースクールは終了した。



11月19日（土）14:30～18:00：事後研修

- ・ 小布施サマースクール2022実施概要の説明
- ・ 高校生と報告会参加者との意見交換

スライドを見ながら6日間の取組を振り返った。参加高校生からは、参加前と参加後の自己の変容について語られた。英語への学習意欲の向上や、学外での課外活動へ積極的に参加することを志しているなどの話があった。また、運営に当たった大学生からも、6日間を通して感じた高校生たちの変容や、高校生の振り返りを聞いた上での感想、あるいは大学生自身の意識の変容が述べられた。

(3) 事後報告会の実施

日時：11月19日（土）14:30～18:00

会場：小布施町商工会議所 2F 会議室

内容：・ 長野県教育委員会あいさつ

- ・ 小布施町議会議長あいさつ
- ・ 小布施サマースクール 2022 実施概要の説明・報告
- ・ グループに別れて感想共有・交流セッション（サマースクールがオンライン開催だったため、報告会時に初対面し交流した）



4. 事業成果について

事業成果については、参加者へのサマースクール参加前後に実施したアンケートにより、4段階評価で計測した。1が「まったく思わない」最低値（ネガティブ値）で、4が「とても思う」最高値（ポジティブ値）である。

以下は、アンケート結果に基づく成果に関する概要である。

(1) 語学力について

- ・「英語で自己紹介ができる」の質問について、参加後には全員が「とても思う」「そう思う」を選択し、上昇が見られた。
- ・「英語で外国人に話しかけることができる」の質問について、参加後には全員が「少し思う」「とても思う」以上を選択肢し、こちらも上昇した。
- ・「将来外国の学校に行きたい」「将来外国の会社で働きたい」の質問について、事前事後の比較で「まったく思わない」「あまり思わない」が減少し、「とても思う」「そう思う」が増加した。

(2) コミュニケーション能力について

- ・「だれにでも話しかけることができる」の質問について、事前アンケートでは「あまり思わない」が一番多かったが、事後アンケートでは「とても思う」を選ぶ生徒が多かった。
- ・「人の話をきちんと聞くことができる」「人のために何かをしてあげるのが好きだ」「人の心の痛みがわかる」のすべてにおいて、「とても思う」が増加した。

(3) 主体性・積極性について

- ・「自分から進んでなんでもやる」という質問について、「まったく思わない」「あまり思わない」を選んだ生徒はおらず、「少し思う」「とても思う」の回答が増加した。
- ・「前むきに物事を考えられる」の質問について、参加後「まったく思わない」を選択した生徒はおらず、「あまり思わない」も減少した。
- ・「先を見通して、自分で計画が立てられる」の質問については変化に差がなかった。

(4) チャレンジ精神について

- ・「小さな失敗を恐れない」という質問について、9名が「まったく思わない」「あまり思わない」を選択していたが、参加後、そのうち5名が「あまり思わない」以上を選択し、「まったく思わない」を選択する人はいなかった。
- ・「うまくいくようにいろいろな工夫をすることができる」「新しいことに挑戦したい」のすべてで、「少し思う」「とても思う」が増加した。大きな変化が見られなかったが、サマースクールには、新しいことに挑戦する意欲のある生徒が集まっている傾向にあると考える。

(5) 協調性・柔軟性について

- ・ 「だれとでも仲良くできる」「その場にふさわしい行動ができる」「自分勝手なわがままを言わない」のいずれにおいても大きな変化は見られなかったが、事後アンケートで「まったく思わない」を選択する生徒はいなかった。

(6) 責任感・使命感について

- ・ 全ての項目で、わずかながらも意識の高まりが見られる。
- ・ 特に「自分がすべき役割をはっきりわかっている」の質問では、「少し思う」「とても思う」で100%となり、意識の高さがうかがえた。

(7) 異文化理解について

- ・ 「交流国の歴史を理解している」の質問についてわずかに上昇したが、他の質問項目に比べ平均値が低い。海外大学生とオンラインでの交流を通じて、他国の文化を理解する難しさや、サマースクールでの異文化理解に関する時間が足りないことによる結果だと思われる。

(8) 日本人としてのアイデンティティについて

- ・ 「日本の文化・歴史を説明できる」の質問について、参加後に改善傾向が見られた。海外大学生との交流を通じて、あらためて日本の文化・歴史を相手に説明できるようになることの重要性を認識した結果ではないかと考えられる。

(9) 外向き志向について

- ・ 「日本人として世界に貢献したい」、「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい」、「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたい」のいずれも肯定的な回答が微増した。プログラムを通じた交流が、外向き志向を育むことに繋がっていると考えられる。
- ・ 特に「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたい」の回答は、100%であった。

実施後も参加者同士の連携活動などを促す取組として、オンライン同窓会を毎月実施し、長野県教育委員会が主催する「マイプロ長野県Summit」などの発表の機会へ積極的に参加を促した。サマースクールでの経験を生かし、様々な活動へ挑戦する高校生の姿が見られた。

5. 高校生の意欲向上に向けた取り組み

(1) 高校生の主体的な進路選択への関心や意欲の促進

- ・ 高校生が希望する進路が実現できるよう進路選択の悩みを聞き、大学生がアドバイスをするなどサポートを行った。
- ・ メンターが自身の学問分野や興味について高校生と共に語り合うことで、学問へ関心と意欲の向上を図った。

- ・ 海外の大学生が行うセミナーを実施し、高校生は海外の大学の授業を模擬体験した。海外の文化に触れると共に学術的な知見を得られるようにした。
- ・ 理系・文系、出身や年齢の垣根を超え、世界中から集まったメンターによる運営によって、多種多様な学びを受ける場を提供した。

(2) コミュニケーションへのサポート

- ・ サマースクール初日にはアイスブレイクとして、高校生の緊張をほぐす企画を行った。メンターとの対話をメインとした企画を行うことで、気軽に考えを共有できるように工夫した。
- ・ セミナーでは、日本人メンターが高校生の英語をサポートした。具体的には、高校生が聞き取れない内容に対して日本語で翻訳を行ったり、高校生が意見を述べる際にわからない英単語を教えたりした。こうしたサポートのもと、高校生は積極的に英語で意見発信を行えるようになった。
- ・ 社会人フリーインタラクティブや小布施町が企画した小布施町民との交流の際には、事前に高校に交流内容を伝え、心理的なハードルを下げた。

(3) 自己に対する理解の促進

- ・ 毎日の「リフレクション」では、高校生自身が内省する時間を設けることで記憶の定着を図り、プログラムから得られた学びをより深いものになるよう配慮した。
- ・ 自己分析ワークショップなどの企画では、自身の進路選択や周囲の環境に対する理解を深めることで自己の確立を促し、他者とのコミュニケーションへの足掛かりとなる機会を提供した。
- ・ 様々な分野で活躍される社会人の講演（フォーラム）やより近い距離で社会人の話を聞く「フリーインタラクティブ」を企画し、多様なキャリアに触れられる場を提供した。
- ・ 小布施町が企画したワークショップでは、サマースクールでの学びをコラージュ作品で表現をし、自身の感情を表現する手法を学ぶとともに、芸術への関心を高めた。

(4) 海外留学のハードルを下げる

- ・ セミナーには、講師として依頼した大学生以外の海外大学生にも協力してもらい、海外大学生を身近に感じられる機会を提供した。
- ・ 海外大学生のみならず、留学経験のある国内大学生が、自らの留学体験などを身近な前例として紹介した。

6. 成果のまとめと今後の課題

(1) 成果

- ・ セミナーでは、英語でのコミュニケーションを積極的に行う参加者の姿が、日を追うごとに増えていった。セミナー初回には、「セミナーの内容や自分の考えを英語で伝えることが非常に難しい。」と難色を示す高校生の声を多数聞いた。学校生活では普段なかなか触れることのない大学での専門的な研究内容ということもあり、英語での語彙、聞き取り能力、意見発信能力には多くの高校生が悩ま

れた。しかし、メンターからの日本語によるサポートや、交流を目的にした企画などによって自身の英語での会話力を最大限に発揮して積極的に対話に挑戦する高校生の姿が多く見られた。

- ・ 自己理解を深め、自己表現力を高めることができた。毎日行われるリフレクションでは、日々の学びや自身の変化を詳細に述べることで、高校生は日々成長していく自分自身の変化の姿に対して、ポジティブな印象をもてるようになっていった。また、自己分析をする企画や小布施町が企画したプログラムでは自分の変化を分析、表現する機会を通して自分を外に向けて発信することに対する抵抗感がやわらいでいき、自信をもって自己表現できるようになっていった。
- ・ 高校生はサマースクール期間中、大学生メンターの所属・人種・個性やフォーラム講師・フリーインタラクショングエストの方々など、異なる世代や属性をもつ人々から知識や経験の刺激を受けて、学んだことをアウトプットすることで、自らの進路選択を真剣に考える場となった。その結果、主体性をもってチャレンジをしたいと思う高校生が増加した。
- ・ 本プログラムの参加者は「マイプロ長野県Summit」に参加し、プログラムに参加していない生徒へ広報をするとともに、自身の学びを大勢の前で発表することで、プレゼン能力を向上させた。
- ・ プログラムを通じて高校生と大学生メンターの相互に交流が生まれ、サマープログラムにのみでは終わらない関係性を構築することができた。報告会の場や個人のやり取りの際にも、悩みを打ち明けていた高校生がいた。プログラム自体は一週間ではあったが、その後もメンターとのつながりは続き、本プログラムでの成果はさらに広がり続けていくものと考えられる。

(2) 課題及び改善に向けた方策

① 海外との交流

本プログラムを通して、コミュニケーション力や英語で自己紹介することへの自信は向上した。一方で、海外の大学生との交流を通じて、交流国に対する理解が不足していることや日本人として自国の歴史に対する理解に不安があることに気づくことができた。オンラインでの交流では時間が限られているので、海外との異文化交流に対して十分に時間を確保することや、自己分析企画などに海外大生も参加することなどを通して相互理解を深められるように工夫していく。

② より幅広い県内高校への広報活動

参加生徒が、各校で体験したことを発表することにしているが、参加したことによって自分がどのように変容したかや、その後どのようなアクションをおこしたかについては、その成果を伝える場面が不十分である。また、コロナの感染対策のため実現しなかったが、報告会への参加者以外の参加を促す等も今後検討が必要である。